

九 鎌倉順禮記

宗 彭

又一坂を上れば一本の松あり。おひのほりたる正木のかつら青つゝら。くる人もまれなるに。山男ひとり爪木とるか。是にとへは能化堂の松これなりと云に。立よりて金沢を見おろせば。詞もなくて。実や此入海はいにしへより。唐土の西湖ともてなしけると聞ても偽りならし。迫門の明神とて入海にさし出たり山あり。古木くろみ

麓に橋有。はしの下よりしほさし入ぬれば。濤濤ととをき山のおくまで湖水と成り。塩引ぬれば水鳥も陸にまふにこそ。水陸の景氣も朝夕にかはり。金岡も筆に及はさりしとなり。来て見る今は冬枯の野嶋か崎とをしふるは。秋の千種の色もなし。水結ひつゝ涼みける折にふれてや名付けん。名は夏嶋に夏もなし。嶋根に海士の小屋みえて。綱をほしたる夕附日。漁村のてらしこれなれや。染てかはかぬ筆の跡。硯のうみのうるひかや。雨にきてまし笠嶋は。人の国なる瀟湘のよるの心もしられけり。日路遠けれと富士の根を。心によせてまたふらぬ。江

天の雪と打なかむ。浪たちかへる市の声。風まちいつる沖津舟。遠寺の鐘もひゞき来ぬ。洞庭とても余所ならず。月の秋こそしのはるれ。水のそこなる影を見て。臂をやのふる猿嶋は。身の愚なるなけきより。おとしてけりなゑほし嶋。海士の子どものかり残す。おきのうちめる鎚の音。荒磯波に釘うたせ。朝夕しほやさしぬらん。箱崎なりとをしふるは。松さへしけりあひにあふ。しるしの箱をおさめつゝ。あめを守ると聞つるに。東のうみのそこふかき。神の心そたつとかりける。

嶋々やいく浦かけて山とうた

いかになかめん三十一文字

かくて爰に日を暮しなんも如何ならんとて。山を下り里に入ぬれば。朝日比の山の端に。織月幽にして。鐘のひゞき海岸のそこにこたへ。岡のやかたはなみにうつり。龍のみやこに入ぬるやとおほつかなし。海士のいさをたよりに宿とひて一夜をあかし。先寺に詣けるに本堂一字有。諸堂皆あと計なる。五重の塔も一重残りぬ。此金沢山称名寺は。何の年にか。亀山院の御願所と号せらる。此所は一切在家をましへす。今の在家は皆當時界内なり。

殺生禁断の浦なりし。漁人など申者一人もなし。時うつり国一度みたれ。寺廃亡してふたゝひ古にかへらす。庄園悉く落て。武家押領の地となり。房跡は漁人のすみかとなり。院には跡なく。海士の小屋数そひ。当寺界外下部ともは。武家の手につき。門外に有なから。かへりてかれらか顔色をうかゝふ有さま。思ひやるへし。仏前の燈もほそく。朝夕の煙も絶かちやと。老僧達三人かたられけるに。袖もうるほしつ。昔船つかはして一切経をも異国よりとり渡し。其外俗書外典共世に類すくなき本共。金沢文庫と書付あるは。当寺より紛失したるなりと語る。経蔵もこほれぬれは。木堂に一切経をはこめ置とや。寺の致□を見めくらしぬれは。山かこみ古木そひえ立て。松杉の□ことに。秋よりけなる紅葉のほのめきて。青地なる錦をはりたらむは。かゝるへきかなと云あへり。

何とたゞ空にしくれのふり分て

そむるかへてにまじる松杉

堂前の池には蓮のふる葉みたれあひ。冬の水ひやゝかに。

伽藍の跡ともは野菜のうねと成。一の室と云へるは。

萱か軒端かたふきて。めくりの房もひえわたりて。人の

おこなひもせず。おもへは還て寂寞無人声の扉をとち。

唯禅観法の床をしめたるに似たり。かく仏法零落の時節。

いかなる人か世に出給ひ。絶たるをつき。すたれたるを

おこし給はんか。慈尊三会の暁をたのむはかりなり。世

に生れて人の時めきさかえ。何事をなすも心にまかせな

らすと云事なく。いきほひに任せぬる事。いく世の因

縁をつみてか。果報のかゝる事・は至るへきそや。た

ゝ人と生るゝのみさへかたき事なり。たとへはあまつそ

らより針をおろして。わたつ海のそこなる一粟をさして

取らむとし。浮木を求る亀のことし。況やかゝるまれ

なる果報に生れあひて。三棟四棟の殿つくり。軒に軒

をならへ。さき草のさきくゝいやましにさかえぬ世に。

浜の真砂の数もかそへても。猶たえぬ祈は。いつの代も

下より上ををしなへて。うとからぬ心なからも。いに

しへのあとをみれば。浅茅か宿にやとる月は夜なく

かはらす。何事も昔は。蓬か袖に引かへたるを見るに

も残る名や。宮寺なといとなみしいかたはかりも世にと

ゝまりて。今の世までも。是はたれ様のはしめて。

草をむすひ置給ふ。これは誰人の立たるを。かさねて取
おこし給ひて。今までかくなんと。所のもの口に残り
て伝へ申を。その代の人の形見とそみる。是をおもへは。
みつからのすまる。いかにもして形見を。神社仏閣に
残さまほしき事也。(此世にはあたなからも。残る名は
くちすしてつたへ。後の世は仏果の縁とならむ。しかる
を時の人は。かゝることはをかりそめにも聞て。かた腹
いたき事に云なせとも。かしこき世々の君。いかばかり
智恵ある人も。信し来たる道なれば。下りたる世のあさ
き智恵にては。此法をそしり破なん。破は安。立るはか
たし。安きは道におし。道はいたりかたきもの也。百日
はかりいとなみし家を破るは。一日の中にあり。何事も
かゝる理とおもふべき也。)此方に来てみしまする笠の
軒もおち。時雨も露も降そふありさまなから。晨鐘夕梵
の声のみ。かつくたえぬ計そ。此法の今少残りたるし
るしとそ聞し。

山言金沢寺称名

閻谷晨鐘夕梵声

時去池蓮余飯葉

院荒籬菊尚殘英

挾楓松竹留秋見

聽雨芭蕉入夜鳴

屋上峯兮廊下海 登臨終口隔人情
池のほとりに一木の楓あり。古為相臆。
いかにしてこの一本に時雨しむ(けつ)

山にさきたつ庭の紅葉は

とよみ給ひしより。此木時雨にも染ぬと。むかしの主に
手向とて。

代々にふるそのことのはの時雨より

染ぬそ色はふかき紅葉は

二日にも爰をさりかたくて。かなたこなたに廻りて。迫
門の明神へ詣けるに。千歳の古木雲をしのぎ。回岸宮を
つゝみたる山のいきほひ。実に巨霊神の手を延て。いつ
くよりか此山をうつしけんとかやしきはかりなり。いか
なる御神そと尋ければ。是は三嶋の大明神。本地大道智
勝仏。伊豆と御一体なりと神職こたへられける。

まうてつるむかしを今に思ひいつの
みしまも同じ神垣のうち

法身妙応本無方

三嶋不阻一封彊

山色涵波頭垂跡

朝陽出海是和光

社の前は嶋をつき出して。弁才天を勧請し。嶋へは第一

第二の橋あり。嶋めぐり。古木浦風になひき。よる波しつえをあらふ。一根清浄なる時。六根ともに清し。我人のかうへに神やとらさらめや。たのもしうそおほゆる。

なみ風も心もなきぬ大海を

さなから神のひろまへに見て

宿のあるし船もよひして。みつから櫓ををして汀を出る

に。秋も過行野嶋こゝなれば。

身の秋をおもひあはせて なり

野嶋の草の冬かれのいろ

夏嶋はなのみなり。時は冬のなかは。

みふゆにもふるしら雪のたまらぬは

こやなつしまの名にしきゆらむ

笠嶋に来て。

かさしまやきてとふ里の夕時雨

ぬれぬやとかす人しありやと

ゑほし嶋といへるは。とはてもそれとしるし。

あさ夕に波よせきぬるゑほし嶋

沖よりあらきかさおりやこれ

箱崎といふあり。

神の守西とひかしはかはれとも

爰もしるしの箱崎の松

明れは三日。鎌倉へ赴くに。一坂をすくれば里あり。爰なんむつらの浦かたとへは。それと答ふ。海士・子とも・あそふを見て。

四つ五つむつらの浦の海士の子の

あそふはしほのとをひかたかな

海士のすみかのあはれをみて。

波あらすむつらの浦のあまの子や

かこふとするもまはらなりけり

(統群書類従本)

〔作者〕 宗彭(一五七三—一六四五)

臨濟宗の僧。沢庵和尚として名高い。俗姓は平氏。但馬出石の人。三十五歳で大徳寺の第一座、堺の南宗寺の住持となる。

寛永六年、大徳寺の法嗣の事に関し、幕府と抗争して出羽に配流され、同九年赦されて帰洛し、後水尾天皇に召されて原人論を講じ、天応大現国師の号を賜わつた。鎌倉順礼記は寛永十年(一六三三)に鎌倉を訪ねた時の紀行文。

十 金澤紀遊

入相過るところ金沢にいたる。大なる入江の左右よりさし出たるところに堤突わたし 万重のさき浪みとりをたたへ 幾縷の夕日うらくと錦を織る。造化のいろとり虹かとうたかはる。堤の中に橋二つかけて潮汐吞吐の口をひらく。堤を隔て内湖外湖名を異にす。こなたの岸に酒うる家両三軒あり。名あるものを東屋といふ。ここに行李を卸て長程一日の労をやすむ。

しくれまつ耳につくなり潮の音 霞兄

廿六日半晴

金沢文庫の跡見んとて雨邨 霞兄 孤米 卓郎など称名寺に遊ぶ。途中の吟二句

山はもみちいよく占き仁王哉 卓郎
機やめてをしへか道のもみち哉 孤米

秋の日暮るにはやく 能見堂の鐘の音初夜と□あらすふ

はかりに更しぬ。雨戸にさやく風はなけれと万うちひらきたる浜辺の住居 たたさへにさえわたりたり。

かう寒い秋を旅籠の薄布団

廿七日放晴春に似たり

今日の長閑さを空うせんやと 小舟かりてそこよこよと逍遙す。送り迎る島々の気色に眼のいそかしうて筆とるも六ヶし。あらましは人々の句につくせり。

とひぬけて一日ぬくしくれの秋 卓郎

夏島にて

岩角の薄にさすや釣の魚 霞兄

枯かゝる草に花咲島根哉 雨邨

汐さきや入江に分るおとし水 八百善

一覽亭

見おろせは見ゆるや秋の行かきり 孤米

兜島の木かくれより小舟一艘こき来るあり。白き扇をうちひらきこなたの舟をさしまねきく来る。何事にやと見るに こは都へもとる黙池か路の序こなたに有と聞て跡追ひ来るにそありける。

島ひとつ出ぬけて島のもみち哉 黙池

夕曛漸く紫に消て 秋の霞の墅よりも水よりも立てさ
もけはくしかりし江のにはひの一段とりしつめて 何
となくものゆかしうおほつかなさへに 立添て見せら
る。

行秋や江におさまりし江の光

暮行まゝに留守守る蟹か燈火の処くに見へて 渺々た
る浪の上いつれをさして東屋ともおもひわきかたし。

同じ燈てあれとおほへぬ明り也 と黙池か：

廿八日くもる。

今はとて金沢を出 江の島に通夜して願香たてまつる。
誓せしといふ人のあるにひかれて朝夷の切通しにかゝる
落葉に辿る坂路の岩穂にすかれる小さき蔦のいまをさか
りに紅葉せる いとうるはし。

秋冬の堺もしれぬ峠哉

(別後日記より 廿九日放晴)

ふたゝひ切通しを過て金沢ちかくなる頃

見知りたるもみちに近き泊哉

霞兄

金沢にやとる。

かまくらにとまらてくやし小夜砧 蒼虬

〔解説〕 「金沢紀遊」は大梅編、沢雉序、大梅跋。天保五年

(一八三四) 刊。天保五年九月二十日、大梅が卓朗、孤米らと

金沢八景に遊び、計らずも抱儀の招きで京都から来た蒼虬の一
行と会い、共に片瀬、鎌倉などを遊歴し、十月二日江戸に帰庵
するまでの道中記で、諸家の俳句、連句漢詩などを挿み、終り
に当時の人々の句二七〇章を四季混題で付録している。

大梅(一七七一—一八四一) 児島氏、名は筠、通称は小島屋西
之助、剩庵、孤山、大梅居などの号がある。江戸蔵前に生まれ
た。儒学を市川寛斎と山本北山に修め、梅外と号して詩をよく
した。のち道彦に俳諧を学んで大梅と改めた。

十一 金澤八景案内子

金沢八景

爰そ武蔵の六浦の庄。四石八木数くくの。多き詠めに金
沢や。筆も及ばぬ。八の景。東を遙に見渡せば。海漫
くと際もなく。釣する舟の浪分て。妻も乙柄帰る帆に。
家路へ急くかつきの業。世渡る業のこと繁く。色く種
に替れ共。恋は隔てぬ中垣や。賤かふせやも一すじに。

君小泉の夜の雨。濡れてしのべは浜風に。裾や小袂はひらりひら。ひらくくくと平潟に。落る雁面白や。頃しもけふは仲秋の。しかも望にてさむらへば。詠めは瀬戸の秋の月。仰ぎ三嶋の御社や。朱の玉垣色添て。野嶋の夕照夕づく日。笠かたむけて遠近の。道行く人はおのつから。画くかごとにありくと。見へつも又はかくれつも。

洲崎の晴嵐是ぞかし。こなたに茂るは内川の。暮雪の景としろしめせ。はや黄昏の鯨音はこれ。称名寺の晚鐘なり。扱八木と申るは。かのもろこしの勝景の。名にしをいたる西湖梅。匂ひも花も外ならで一木にこもる桜梅。名のみ残りし黒梅に。枝葉栄へて千代の声。雀か浦の一ツ松。同し非情の樹なれ共。怖しき名の蛇混柏。和哥の徳にて色染ぬ。青葉の楓青丹よし。奈良の桜にけをされぬ。

文珠普賢の二本は。飛花落葉の有様に。無常をしめす法の場。まつた四石の其内に。美女石姥石二は是。人生の盛衰を。不朽の石に。なそらへて。末世にのこすためしとかや。次に名たまる飛石は。仏神応護の力にて。ふしぎの象を顕せり。扱福石と呼ぶ故は。此琵琶嶋に立給ふ。

弁賤天の誓にて。国土の衆生に幸福を。施し給ふ奇瑞なり。其外数多の名所は。具に語りも尽されず。かゝる無双の絶景を。洩さず眼下に備ふる事。能見堂の名にめでよ。よく見給へや旅人と言葉艶して案内子は。おしへてこそは帰りけれ。

彫工中出□印

能見堂八景

洲崎晴嵐

心越禪師

滔々曝浪歛ニ余暉ニ滾々狂波遶ニ竹扉ニ

市後日斜人静悄行雲流水自依依

無生居士

にきはへるすさきの里の朝けふり

はるゝあらしにたてる市人

瀬戸秋月

清瀬涓々不レ繋レ舟風伝ニ虚籟ニ正中秋

広寒桂子香飄処共看氷輪島際浮

よるなみの瀬戸の秋風小夜ふけて

千里の沖にすめるつき影

小泉夜雨

暮雨凄凉夢亦驚甘泉汨々聴分明

蓬窓淹蹇無_二相識_一腸斷君山鉄笛声
かぢまくらとまもる雨も袖かけて
なみたふる江の昔をぞおもふ

乙艦帰帆

朝宗万派遠連_レ天無_レ恙輕帆掛_二日辺_一
歎乃高歌落_二雲外_一依稀数艇到_二洲前_一
沖津舟ほのかにみしもとる梶の
をともの浦にかへるゆふなみ

称名晚鐘

夙昔名藍成覚地華鐘晚扣若_二鯨音_一
幽明聞者咸生_レ悟一片迷離祇樹林
はるけしな山の名におふかね沢の
霧よりもるゝいりあひのこゑ

平潟落雁

列_レ陣冲_レ冥堪_レ入_レ寒荻蘆蕭瑟幾成隊
飛鳴宿食恁棲遲千里伝_レ書誰不_レ愛
跡とむる真砂にもしの数そへて
しほの干潟に落る雁かね

野島夕照

独羨漁翁是作_レ家持_レ竿盪_レ漿日西斜
網_二得魚_一来沽_レ酒飲披_レ箕高臥任堪_レ誇
夕日さす野嶋の浦にほすあみの
めならふ里のあまの家々

内川暮雪

広陌長堤竟没潜奇花六出似_レ鋪_レ練
渾然玉砌山河色遍覆_二危峯_一露_二些尖_一
木陰なく松にむまれてくるゝとも
いざしらゆきのみなと江のそら

武州金沢擲筆山能見堂有_二瀟湘八景_一
之風味_二因觀_二鎌倉志_一甚詳_レ耳一夕寥々
对_二青燈_一漫賦_二八景之陋句_一以識_二斯勝境_一
云歲執徐正夏日東皇越杜多艸

天明甲辰秋七月擲筆山地蔵院現住来仙再刻
〔書き下し文〕

能見堂八景詩

心越禪師

洲崎晴嵐

滔々たる巖浪に余陣歛まり 滾々たる狂波竹扉を遶る

市後口斜にして人静悄たる 行雲流水白ら依々たり

瀬戸秋月

清瀬涓々舟を繋かず 風は虚籟を伝へ正に中秋たり

広寒桂子の香飄たる処 共に看る氷輪の鳥際に浮ぶを

小泉夜雨

暮雨の凄凉たる夢にも亦驚き 甘泉の泪々たる分明に聴く

蓬窓淹蹇として相識るもの無く 腸は断つ君山鉄笛の声

乙鱸帰帆

朝宗する万派は遠く天に連り 恙無く輕帆は日辺に掛かる

歎乃高歌雲外に落ち 依稀たり数艇洲前に到る

称名晚鐘

夙昔より名藍覚地を成せり 華鐘晩に扣けば鯨音のごとし

幽明聞く者咸悟を生ず 一片の迷離祇樹の林

平瀉落雁

陣に列し冥に沖して塞に入るに堪え 荻蘆蕭瑟して幾ど隊を成す

飛鳴宿食して恁く棲遅せり 千里に書を伝へたる誰か愛せざらん

野島夕照

独り羨む漁翁の是に家を作る 竿を持ち槩を盪かし口西に斜なり

得魚を網もてし来り酒を沽し飲む 蓑を披き高く臥して任に誇に堪えたり

内川暮雪

広陌長堤竟に没潜す 奇花六出して縑を鋪くに似たり

渾然たる玉砌山河の色 遍く危峯を覆へども此一尖を露はす

〔解説〕 本書所載の「金沢八景案内子」は天明四年（一七八四）擲筆山地藏院現任来仙の時に作られたもので、前半は金沢八景の紹介、後半は金沢八景の詩歌を収めている。金沢八景の紹介は七五調で八景の情景、金沢の名物である四石、八木について述べ、金沢八景の詩歌は漢詩と和歌を載せている。漢詩は東臯心越禅師、和歌は無生居士（京極高門）が作ったものである。

心越禅師（一六三八—一六九五）名は興偉、字は心越、明国浙江杭州の人。明が亡んだ後、清朝をいさぎよしとせず日本に

亡命、延宝九年（一六八一）、長崎の興福寺に住む。水戸光圀に招かれて大徳寺に住み、寺名を寿昌山祇園寺と改め、開山第一世となつた。詩文書画に長じ、弹琴をよくした。元禄七年九月水戸から相模国箱根塔の沢温泉に入湯し、途中東海道を鎌倉、金沢へと寄り、能見堂の風景を鑑賞した上、詠んだものと思われる。

無性居士（京極兵部高門）（一六五八—一七二二）江戸生まれ。但馬国豊岡の領主、京極飛騨守高直の子。幕府役として寄合衆となる。中院通茂の門人、国学者で歌をよくす。金沢を来訪した時期は不明であるが、「走湯行記」「湯沢紀行」などの著書もあり、元禄の歌人としては名家の統を嗣ぐものとして重んぜられていた。

十二 金澤能見堂八景縁記

夫当山の濫觴を尋るに 今にいたりて九百有余年の
むかし 人皇五十九代宇多天皇の御代仁和年中に巨勢の
金岡といふ絵師 東へ下りしころ 此松が根にてかゝる
海山の勝景を書写さばやとて しばらくめで侍りしうち
雲霧のたちまひに浦波嶋山のさま千変万化に見へわたれ

ば 終に筆を捨て賞敷せしとなん それより里人 此老
木を名づけて筆捨松といふ 其後七十余をへて 寛仁
年中御堂関白藤道長公此所に来り此絶景をめさせ給ひ
て草庵を結ばせ給ひしは すなはち此能見堂なりけり
其折しも彼関白殿めし給へる御ぞをぬきて 此正面なる
松が枝に懸させ給ひしを 里人から見申てより関白の絹懸
松とは中伝へしなり 夫より相つゞきて入江の上に松の
森の見ゆるは 其さまのにたるをもて塗桶山と申て富士
浅間大ぼさつをぞ祝ひ奉りぬ 扱又此金沢八景と申は延
宝年中唐土の沙門東皐心越禅師 常陸の国水戸に来りて
居住し給ひしが かゝる勝景を聞及ばせ給ひ 此山堂をと
はせ給ひつゝ彼国なる西湖瀟湘の風景に其まゝなりと幽
賞のあまり 一夜燈火のもとにて八首の詩を作りて雅懐
を伸給ふ すなはち其自筆の一軸今に当山の宝物とはな
りにけり さればその八景と申は先此右の山のふもととな
る田間の小水の流より 入江へかけて内川と申を 彼紅
天の寒色に比して内川暮雪と名付 同く向ふの人家の見